



チンギス・ハーンの世界統一 (草原の道の王者②)

7月②のごあいさつ

山内公認会計士事務所

2022年7月11日(月)

13世紀初め、モンゴル高原から、テムジンに率いられたモンゴル族が勃興してきた。テムジンは1206年の春、モンゴルの代表者の大会議(クリルタイ)を召集し、全部族による決議によって、正式に王位に登り、「勇猛な」を意味する「チンギス・ハーン」という称号により全蒙古の支配者になった。そして、その命令に服さない者は破滅をもって罰するとした天の神託を得たとして、全ての遊牧民族の掃討を行った。

チンギス・ハーンは、先ず西夏を属国として後、ウイグル族を下し、西遼を服属させた。1212年、金と断交して、1215年中都を占領し、黄河以北の地を割譲させ、皇帝の称号を廃させた。続いて満州方面を征服した。

一方、西北へは天山山脈の北と南を征し、ホラムズ帝国を撃滅した。チンギス・ハーンは1225年2月に本拠に帰ったが、別動隊はイラン、コーカサスを経て、南ロシアまで遠征した。ホラムズ遠征から帰ったチンギス・ハーンは1227年西夏を亡ぼしたが、その直後の8月陣営で死んだ。

モンゴルの征服戦争が非常な成功であった理由は、抵抗する者を決して許さず、最後の一人まで殺し尽くすが、抵抗せず降服する者は、人頭税を払わせるだけで助命し、自治を許すという、わかりやすい原則を実行したことである。併せて、事前に情報を集め綿密な作戦予定に従って行動し、作戦中は指揮官の命令を厳守し、兵士は乗馬の外に替え馬を用意し、統一行動の習慣のない敵方を各個撃破して敵方を圧倒した。

チンギス・ハーンを継いで第2代ハーンに即位した、三男のオゴディ・ハーンは1234年に金を滅亡させ、首都をカラコルムに移してクリルタイを開催し、次の征服対象地として、ヨーロッパと決めた。

ヨーロッパの遠征は、チンギス・ハーンの孫、バトウを司令官として、疾風怒濤の進軍により、1238年モスクワを陥落させ、1240年には、南ロシアの大都市キエフを占領し、徹底的に破壊し、後のキプチャック・ハーン国の建設の基礎を作った。次に中部ヨーロッパに向い、1241年春に神聖ローマ帝国・ポーランドの連合軍との大戦争で圧勝し、連合軍側の死者は草原を覆い尽くした。1251年に第4代のハーンに選出されたモンケは、帝国の内紛を清算し、中央集権を強化して、直ちに、西アジアと南中国を目指し、遠征軍司令官として2人の弟、フレグとフビライを任命した。

フレグは1258年、バグダードを陥落させ、500年余り続いてきたアッパース朝を滅亡させ、この地の蒙古ハーン国(イルハーン国)の基礎を築いた。

フビライの遠征軍は、四川からチベット一帯を征服した後、北上して南宋を圧迫し、後に元王朝を建てた。

モンゴル帝国の時代は、世界史の始まりと言われている。

それは、東の中国世界と、西の地中海世界を結ぶ「草原の道」を支配することによって、ユーラシア大陸に住む全ての人々を一つに結び付け、世界史の舞台を準備したからである。

また、モンゴル帝国がユーラシア大陸の大部分を統一し、それまでの政権が一度ご破算になり、改めて新しい国々が生まれたことも大きい。

更に、華北で誕生していた資本主義経済が「草原の道」を通過して、地中海、ヨーロッパ世界へと広がって、現代の経済の幕を開けたと言える。

参考：(モンゴル帝国の興亡、岡田英弘著、筑摩書房、草原の道 文明交流圏
小林道憲著、草原帝国、重慶出版社 格鲁塞著)